

『青森県史 通史編1 原始・古代・中世』（原始・縄文）

須藤 隆

はじめに

青森県史の編纂が始まって二二年の歳月を経て、多大な精力を注ぎ、膨大な量の調査、研究資料を緻密で的確に収集、解説した資料編の刊行が完了し、それらの史資料を駆使して『青森県史 通史編1 原始・古代・中世』が刊行された。本書は、「歴史」の難解な専門語を分り易く説明しつつ、整った、簡潔な文章で綴られている。近年刊行された自治体史としては卓越しており、歴史好きな読者の知的好奇心に応えるばかりでなく、中学、高校生、大学生や歴史研究者にとっての得難い好著である。通史2と3が対象とする時代が合計約四〇〇年間なのに対して、本書は旧石器時代から中世の終わりまでその七〇倍近くもの時代を対象とする。ここではそのなかでも最も長く続いた狩猟・採集社会である旧石器時代から縄文時代に関する記述（第一章・第二章）について所見を述べたい。

一 第一章「狩人の時代」

青森県では三〇ヶ所を超す旧石器時代の遺跡が確認されているが、このうち精査されているのは、外ヶ浜町史跡大平山元遺跡など六遺跡にと

どまるといふ。大平山元遺跡では、長者久保、神子柴遺跡や渡島半島のモサンル遺跡などから出土した石器群との関係性の追求という重要な課題があり、さらなる探究が期待される。東通村尻安部洞窟の調査は、物質文化と動物遺存体の共伴関係の研究のあらたな動向の契機となると考える。田向冷水遺跡では、深さ二メートルを超す火山灰堆積層を掘り下げ、十和田八戸火山灰の下、高館火山灰の上から層位的に約二万点の後期石器が九ヶ所の集中で検出されている。厚い火山灰堆積層を下げ、層位的、面的に精査した努力を高く評価したい。

青森県には多くの旧石器時代の遺跡が分布し、最近の画期的調査、研究動向から、今後の飛躍的進展が期待される。

二 第二章「縄文のかがやき」

地質学的には約一万一千年前に完新世が始まるが、すでに約一万六千年前の史跡大平山元I遺跡から、神子柴・長者久保石器群にともなつて、無文土器と石鏃が出土しているという。土器の形態は、かつて伊東信雄東北大学教授が調査したサハリン乙名丘遺跡で有舌尖頭器、局部磨製石斧群とともに出土した「宗仁式土器」のように平底、角底（鉢）である。大平山元I遺跡出土土器は、茨城県ひたちなか市後野遺跡出土無文土器とともに日本最古の土器群とされている。

大形局部磨製石斧と石鏃がこの無文土器に共伴することから、更新世最終期の寒冷期にシカ、イノシシ、ウサギなど小型獣を狩る弓矢を使用していることが明らかにされた意義は大きい。

水河時代最終末頃、約一万五千年前の十和田八戸火山灰に覆われた縄文草創期の大矢沢野田埋没林は、当時の自然環境を空間的ひろがりて理解できる点で重要である。こうした空間に焚火痕、獲物の解体骨、道具である石器といった人間活動の痕跡が検出される幸運があれば、人自身然とのかかわりの理解が大きく深められるものと期待される。そのためには多大な努力と現状をのりこえる探究心が求められるのであろう。

八戸市の櫛引遺跡では多縄文土器期の竪穴住居跡と土坑が調査され、縄文人の定住生活の形成過程を理解するうえで重要な手掛かりが得られている。この時期に、土器や加熱した石で捕獲、採取した動物、植物質食料などを蒸し焼き、煮沸するようになり、大きく生活の変化が進んだと指摘する。

縄文時代の自然環境については、一万二千年前からの温暖化で東北北部ではコナラ属類を主体とする冷帯落葉広葉樹林が拡大、さらに九千年頃から日本海に暖流が北上することでブナ・ナラ林が拡大し、クリ、トチの実、ドングリ類などの堅果類が縄文人の定住化を確立させたと指摘されている。九千年前頃からは縄文海進が始まり、七千年前頃にピークに達した。また黒潮が七千年前頃には三陸沖まで北上したという。古十三湊湾、古小川原湖周辺に貝塚が発達することとなる。そして約一万三千～一万年前に十和田二ノ倉火山灰、八千六百年前頃に十和田南部火山灰、六千二百年前頃に十和田中振火山灰が降下し、周辺の人間活動に大きな影響を与えるとともに、考古学的には重要なキー層となっている。

第一節「縄文文化の特色」では、西田正規の論じる「小規模な集落を形成したこの縄文社会は、生業に関する基本的道具や技術、集落規模を

ほとんど変化させることなく、大陸に起源した文明社会の影響を受けて崩壊するまで七千年以上にわたって持続した」という評価を受けて、「安定した社会」がどうして継続し維持されたのかを究明することを課題としている。その上で、本書では「自然の恵みに頼って安定した小さな社会を一万年の間維持してきた縄文人社会」と「食料を生産し、変革を求め大きな社会を作ろうとした」弥生人社会や文化が大きく異なるとの見方が示される。また、「安定した小さな縄文社会」が、長い間維持されたのは、日本列島が南北に細長く、四季がはっきりとしており、自然界の食料などに恵まれていたことが大きな要因であると指摘する。縄文人が食料の保存、貯蔵法の開発に成功して食料枯渇期を克服し、安定した生活を営むことができたと論じ、さらに進んで、食料拡大、再生産の道をとらなかつたと強調する。植物栽培に関して、縄文人は知識としては知っていたようだが、あまり熱心ではなく、道具の改良も少なく、食料備蓄で得た余力を土器作り、漆器作り、工芸的製品、祭儀器作り、祭祀施設の造営などに注ぎ、ポトラッチにより富の分配が行われたと推測する。

評者は、本書で示されたこうした「西田モデル」による縄文時代の歴史観、文化観には次のような、検討を要する点があると考ええる。

第一に、縄文と弥生をふたつの文化、社会として分断し、両者の間の時間的推移、継続性、斬新的変動、変容の視座が欠落、あるいはそうした観点を低く評価している。

第二に、縄文時代の長い時の流れの中で、恵まれた環境、あるいは自然の猛威、災害のもと、様々に工夫に努め、発展、克服し、その適応力、

知識や技術力、体系を蓄積、高揚させ、また人、モノ、情報の交流のネットワークを育み、駆使し、時には劣悪な環境を克服し、環境の保養力を最大限まで活かしてより豊かで大きな社会を築き、多様性のある文化を営んだとみてもよいのではないか。

第三に、弥生時代の社会、文化の変動も一千年余りの時間の流れの中で、漸次、あるいは急速に、また加速的に発展を遂げたのであって、「変革を求め大きな社会を作ろうとした」という現代人の主観的解釈は当たらない。むしろ階層社会、都市、国家の発達は、歴史的発展の結果であって、それを前提に社会、文化の変動、変化、時代的変遷の状況を「文化的差異」として比較し、論ずることに混乱があるのではなからうか。

縄文人は、大型建物のような共同の大型施設を構築し、環状列石のような記念物を造営し、祭りにも利用した。祭りの道具も土偶、石偶など多彩である。石棒、土偶などの儀器類、漆塗りの装身具、土器、弓矢など供献品に、工芸的な様々な加飾が行われるが、本書では「こうした工芸的製品が日常生活で使用され、洗練された文化を確立している」として縄文文化の特色であると指摘している。

また、縄文時代の女性との関連で土偶が取りあげられる。土偶は、自然の恵みをもたらす精霊の依代で、女性の守護神として女性によって祀られたと、「土偶の豊穰神説」を明快、平易に論じて説得的である。縄文時代の食料事情を支えた植物性食料の採集は、主に女性が携わる安定した生業活動であり、また出産、子育ては、女性の大切な仕事で、縄文土器作りについても、その活動が世界の民族例で女性が多いと指摘されていることをあげ、やはり女性の仕事であったと推測する。確かに粘土

の採取、運搬、燃料確保、成形、装飾、焼成といった土器作りに関わる一連の作業は、編み物などと同様に母から娘、さらに孫へと伝えられる重要な技術体系のひとつであった可能性は強いと推測される。しかし前期、中期に盛行した円筒式土器や大木式系土器、火炎土器のような装飾豊かな大型土器も、果たして女性のみで製作、焼きあげられたのであろうか。時期、地域による変化、変異について調査資料の多面的研究を試み、縄文人の土器作りの実態を検証し、民族例のひとつとしてモデル化することが肝要であろう。

「世界の採集民から見た縄文人」では、北アメリカ大陸での民族学的調査、研究による採集狩猟民社会の事例から、サケや堅果類を備蓄し、定住生活を営んだ北西海岸の先住民について報告されているような大規模な集落を抱え、階層的な不平等な社会を発達させ、戦争もおこした備蓄型採集狩猟民とは異なり、縄文社会は、優れた指導者はいっても不平等社会、戦争を裏づける考古学的証拠は認められておらず、小さいながら安定した社会を一万余年維持したところにその特色があると強調する。さらに縄文人ほど土器や土偶、漆製品など美術的に優れた製品を多数産み出した食料採集民はいないと主張する。

第二節では、縄文土器について、名称の由来、考古学の学史、土器型式についての基本となる考え方、その意義を分かり易く解説している。そのなかで縄文土器の変遷について六期大別区分にしたがって、草創期の無文土器、隆起線文土器から晩期の亀ヶ岡式土器に到る型式推移が青森県内の豊富な資料に基づき簡潔に纏められる。

縄文土器の解説に続く縄文人の生業、生活、社会、文化などについて

の本書の記述は、極めてよく事項選定がなされ、適確で分かり易く、平明な文で綴られており、構成も素晴らしいと評価したい。

第三節では、縄文人の生業について、植物採集、狩猟、漁労を基本とすることが、膨大な調査資料によって具体的に論じられている。円筒式土器期の縄文社会では、自然に繁茂するクリを集落周辺でクリ林として管理するようになり、効率的に安定した採取が行われた可能性が指摘される。弓猟、落とし穴とわな猟についても豊富な調査資料によって詳細が述べられている。

第四節では、縄文人の生活ぶりについて、食べ物の種類と食器、衣類、装身具の種類、生活用具、殊に土器、木製品、漆塗り製品、編み物、樹皮製品、骨角製品と順次ふれる。縄文人の多様な道具のなかでも、八戸市の是川中居遺跡から出土した大きな樹皮製の蓋付き容器は、美しい赤漆で飾った「曲げ物」を想わせる優品であり、縄文人の卓越した工芸技術力がうかがえ特記される工芸品といえる。

第五節では、縄文人の生涯が、妊娠と出産、子供から大人へ、病と老化、そして縄文人の死と再生への願いへと語られる。とくに葬制研究は、縄文人のイデオロギー世界を考えるうえで、その推移の解明が重要である。草創期、早期にはすでに住居の傍らに埋葬のための墓坑が営まれ、早期中葉、前期前葉により規模もふくらみ、副葬品も多様になることが指摘されている。

第六節の縄文人の集落と交流では、縄文人が生活し、その複雑、多様な文化を営んだ場である集落を、取りあげ、その構成の発展、推移の実態解明に実証的に取り組み説得力のある解釈が提起されている。最初に

青森県内の縄文時代の遺跡数や遺跡から検出された竪穴住居跡の数の変遷が検討され「縄文時代の人口は安定したものではなかった」ことが指摘される。前に指摘したように「小さな縄文集落、集団が一万年間、安定した社会を営み続けた」のではなく、縄文時代の社会・文化は様々な要因によって衰退と興隆を繰り返して複雑化してきたと考えられよう。

続いて集落構成とその変遷では、集落構成 (Settlement Pattern) の推移が取りあげられ、葬送、祭祀的活動は、後期、晩期までは環状集落の中で一体化しており、より「日常的」であったといえるが、晩期になると、青森市朝日山遺跡のように集落の生活居住域から独立するようになって「非日常」化した葬送、祭祀の場が出現することが指摘されている。こうした研究成果は、私たちが用いている基本的概念それ自体が重要な研究課題であることを気づかせてくれる。

縄文人の居住施設に関しては、掘立柱建物について入念な検討がなされている。円筒土器文化圏では、中期中葉に掘立柱建物が出現し、三内丸山、三内丸山(9)遺跡、弘前市独狐七面山遺跡、鱈ヶ沢町東禿(2)遺跡、八戸市松ヶ崎遺跡、富ノ沢(2)遺跡、三戸町泉山遺跡と、青森県に広く分布する。円筒土器文化圏の掘立柱建物は、一間×二間の構造が主体で、太い柱の建物が含まれることが特徴的であり、三内丸山遺跡では集落中央の南北盛土の西側から一間×二間の掘立柱建物が重複して検出されており、総数は百棟を超すと推定されている。その機能については、倉庫、葬送儀礼に係る施設との考え方があがるが、まだわからない課題が多く今後の多角的検討が必要と指摘する。大木式土文化圏の岩手県奥州市西田遺跡、山形県村山市西海測遺跡の環状集落では、墓域を核とする配置関

係から、掘立柱建物群は「日常生活空間」で居住域にあると指摘する。「日常的な空間」に葬送、祭祀儀礼空間がなお未分化であった集落構成が、晩期頃までに両空間がより隔絶化するとともに、建物の機能がより多様化する「歴史的」展開を遂げるのではなからうか。

三 まとめ

最後に、青森県史通史編1の第一章狩人の時代、第二章縄文のかがやきを通読し、評者の考えたところをいくつかまとめておきたい。

青森県内では多くの遺跡が、文化財保護法に基づいて考古学を研究する調査担当者によって毎年地道に発掘調査され続けてきた。担当者は調査から多くを学びつつ、調査法を絶えず検討、工夫し、さらに調査成果の関連資料を丁寧に渉猟する。こうした真摯で精力的な努力の積み重ねによって更新世の水河時代末の約二万年前から縄文時代終末の二千三百年前頃までの、東北地方北部地域における「歴史」の理解が深められたといえる。難しい専門用語は平易に分り易く記述されており、構成は見事である。

「考古学の研究者は、いつまで調査し続けるのか」というパターン化を目指す民族学、文化人類学の研究者からの強い叱責に対する重要な答えを本書から得たと感じている。様々な破朽、消滅の悪条件を乗り越えて、遺存されてきた埋蔵文化財は有限であって、社会、文化の「歴史再構成」を可能にする掛け替えのない資料といえる。遺跡は、大、小、新、古、地域などにかかわりなく、様々な事象を抱えている。それを的確に

資料化できるかが問われ、その方法を提示する努力が求められているといえる。

第一章で取り上げられた「ミトコンドリア・イヴ仮説」に依拠したアフリカ大陸に起源し、ベーリング海峡を越えてアメリカ大陸まで、新人が拡散し、原人、旧人、そして新人へと進化を遂げたとする「多元起源説」を排した斬新な仮説援用については、ミトコンドリアの研究は10年、DNAの人類学的研究は五、六年程の研究段階であり、今後の精緻な研究の展開が期待されている状況であろう。これまで蓄積されてきたアフリカ、中東、西アジア、ヨーロッパ、東アジア、東南アジア、アメリカ大陸など様々な地域における調査資料と研究成果をも踏まえた多面的探究が、より精度の高い仮説を構築していくうえでの大切な取り組み姿勢ではないだろうか。また、青森県三〇ヶ所の旧石器時代遺跡のうち、外ヶ浜町大平山元遺跡群の地域総合調査、八戸市田向冷水遺跡における厚い火山灰に埋没した生活面の層位的、空間的調査、さらに下北郡東通村尻安部洞窟遺跡の化石獣骨と石器との共伴関係追究調査は、東北北部はもとより、日本列島の旧石器時代研究に裨益する重要な調査である。こうした積極的な調査が期待される。

第二章では、縄文時代に一万年以上にわたって小さな狩猟採集民の社会が存続したことを強調する「小さな社会モデル」について、青森県内の豊富で多様な調査成果に基づく入念な分析と再構成から、強い疑念を抱かされた次第である。青森県は、十和田湖、八甲田山、岩木山、恐山と火山活動の活発な環境にあつて縄文人の集落は繰り返し壊滅的状况に置かれたようである。しかしその過酷な状況を克服して復興を遂げ、時

には激変した新たな環境に適応し、より規模の大きな安定した狩猟採集民集落を形成している。円筒土器文化圏の三内丸山遺跡にみられる大規模拠点集落の構造は、王墓と大規模な共同墓域を抱えた弥生中期の佐賀県吉野ヶ里遺跡に遜色なく感じられる程の共同墓が発達している。縄文時代の三内丸山遺跡と弥生時代環濠集落との基本的違いは明確である。王の支配する階層社会の農耕集落と経験豊かな優れた長老たちの指導する狩猟・採集民社会の相違であるといえよう。そしてその発展は、様々な生活器材、狩猟・漁労具類、装身具類、ベンガラ、水銀朱などの顔料確保と製作技術の改良と創意工夫である。また同様な動向は、ウルシの管理的育成、搔き取り・採取、籠・木製品・弓・土製品・土器などへの塗布技術によくうかがえる。その卓越した技術水準はしばしば現代人を驚かせるレベルと指摘される。

こうした技術体系の到達点は、縄文時代の狩猟採集民の生産活動の熟練度の高さを明らかにしている。そして、製品の分配と交易活動の興隆は、縄文社会を活性化したといえよう。

最後にこうした動向を理解すると、縄文時代の狩猟採集民文化は日本文化の基盤文化であって、草創期から晩期までの一万年を超す変動の「歴史」を抱えており、衰退と興隆を繰り返しながら多様化と複雑化を遂げたといえる。そして大陸農耕文化、文明の影響のもとに弥生農耕社会・文化へ変容を遂げる。両者は異質な社会・文化ではない。縄文時代から弥生時代への日本列島各地での興味深い変動、発展の「歴史」がある。そして弥生時代の社会・文化にも変動と発展があり、大陸の歴史の世界に組み込まれていく。この弥生文化・社会もまた日本文化社会の

基盤文化・社会であり、一体的に検討されることが不可欠であろう。

(菊判、七八七頁、青森県、平成三十年(二〇一八)三月十五日刊行、
本体価格三二〇〇円＋税)

(すとう・たかし 東北大学名誉教授)